



University of Wollongong より豪州の大学を概観する

杉 井 俊 夫

1 はじめに

9月11日朝7時5分晴天のシドニー空港に我が家5人が降り立った。日本では、蒸し蒸しとしていたのに、こちらはカラッとしていて建物から出ると肌寒い感じがする。日本は晩夏であるが、こちらは早春である。予約してあったピックアップサービスを探していると、University of Wollongong (以後、UOW) の大学ロゴ入りの旗と Sugii Family のプラカードが……ほっ。運転手らしいプラカードの持ち主に、もう1組の passenger がいるから、ここで待っているようにと広い場所へ案内された。すると、一人の女性に「UOW へいくのですか、私も同じところへ行きます。よろしく。」と話しかけられた。他大学の研究者かと思ったら教育学部学部長補佐の教授であった。メールが繋がり次第、メールしてくださいとネームカードを貰った。家内にも分かりやすい英語で話してくださり、優しい先生(人と国)と印象を受けたのが、初めてのオーストラリア、Wollongong (ウーロンゴン) に接した瞬間だった。

2 UOW を取り巻く環境

UOW (University of Wollongong) って聞いたことないなあと言われる方がいると思う。場所は、NSW (ニューサウスウェールズ) 州にあり、シドニー空港からフリーウェイで1時間ほど海岸線に沿って南へいったウーロンゴンという町にある州立大学だ。NSW には

シドニー大学(1852年)、ニューサウスウェールズ大学(1958年)などの50年以上の古い大学があるが、UOW は1975年創立の比較的新しい大学に入る。日本では、神戸大学、筑波大学、上智大学、小樽商科大学、広島修道大学他と交換留学生の提携を結んでいる。キャンパスの広さは、82.4ha で中部大学の2倍強の広さを持ち、学生数は約15,000人で、豪州の大学としては中規模だ¹⁾。学部は、人文、商学、芸術、教育、工学、保健・行動科学、法学、理学、情報工学の9学部が設置されて



写真1 記念撮影をする人が多い正門前



写真2 学生が昼食を取ったり昼寝する芝生

おり、私は、工学部の Department of Civil, Mining and Environmental Engineering (土木・鉱山鉱物・環境工学科) の私の 2 つ年上の Prof. Indraratna ところにお世話になっている。

ご存知のようにオーストラリアは鉄鋼、石炭の世界的な輸出国であるが、このウーロンゴンの港が石炭を積み出す港である。工業港というと空気の汚い灰色の景色が浮かぶかも知れしれないが、今では南のケンブラ港に移っており、薄汚れたイメージとは全く違う。ここは細かい粒の揃った砂の美しい浜が何 km も続き、真っ青な空を V の字の群れになって飛ぶ白い鷗の姿は筆舌に耐え難いくらいのコントラストを感じさせる光景である。さらには、この砂浜は鳴き砂 (Musical sand) といって乾いた砂の上を歩くとキュワッ、キュワッと鳴く (メカニズムを説明するのは紙面がかなり必要なので省略させていただく。どうしても知りたい方は三輪先生の www.bigai.ne.jp/~miwa/index.html へ)。北陸の「琴が浜」は有名な鳴き砂の砂浜であるが、今では砂が汚れて鳴き難くなっている。

一方、ここウーロンゴンの砂浜は何処でも鳴くという。オーストラリアの砂浜の砂は世界的にもきれいで日本やハワイにも輸出されている。また、この「Wollongong (ウーロン

ゴン)」という地名は、烏龍茶？中国に関係あるのか思う方が多いかもしれないが (私も最初は・・)、原住民のアボリジニの言葉で「砂に打ち寄せる波の音」というなんともロマンチックなネーミングから、この砂浜のイメージをご理解いただければよい。

学生は約 70 カ国から集まっていおり、アジア系が半分以上で、その中では日本・韓国人は少ないようだ。キャンパスは低層の建物で、高くても 3 階立て程度で威圧感を与えるような建物はない。寮などの 20 棟ほどの宿泊施設を除いても 50 棟ぐらいが緑キャンパスの中に建っている。建物は、私の部屋から廊下での話し声は勿論、隣室のポスドク研究員の論文を読む声 (彼は毎回音読する) や鼻歌がそのまま聞こえ得るようなところで気密性や剛性は全くない。建設中の民家も細い柱



写真 4 キャンパス内を流れる小川



写真 3 鳴き砂の広いビーチ



写真 5 自然色に調和したキャンパス案内板

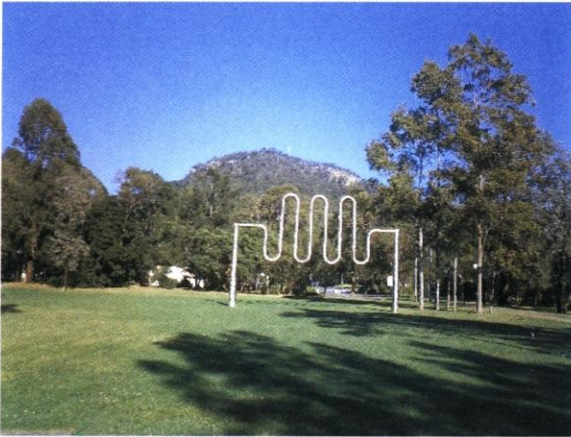


写真6 キャンパス横の Mt. Keira (486m)

で大丈夫かと思わせるような造りである。オーストラリアでは地震は少ないが皆無ではない。現地の建設業の技師に聞いたところによると「地震、そんなの 10 年位前に 1 度起きたきりさ。そのくらいの柱で十分だよ。」と言われた。こちらの建物はレンガ張りが多く、大きな地震では持たないだろうという感じだが、地震なんてこれまた全く心配していない。

一方、キャンパス内には芝生や木々が多く、人工の池や小川が流れており、きれいな珍しい鳥や野うさぎが見られ、まるで国立公園のようである。しかし薄暗い夕方には、鳥の声と木々の多さで、なにやらジャングルに迷いこんだ感がある。キャンパス西隣にキーラ山 (Mt. Keira) があり、さらにパノラマ感を増している。大学の隣には、ほぼ大学と同じ規模のウーロンゴン植物園があり、山と海が隣接している自然が豊富なところである。

学内には、文房具なども揃えている郵便局、売店 (ユニオン)、美容室、歯科、クリニック、銀行、旅行代理店、学生生活サービスセンター、職員と学生の子供を預かる保育所 (Kids' Uni) そして、地域社会とも密接に繋がっており、学内の図書館、プールなどの体育施設 (Recreation and Aquatic Center)、科学センター (Planetarium) や映画館 (Uni Movie)

などが一般の方に解放されており、映画館はウーロンゴンでは最も大きい映画館で毎週水曜日に上映される。まさに、UOW は市民が誰でも使える公共施設のようである。

大 学		ティフ (TAFE)	
18歳 17歳	高等学校(2年間) (Secondary School) (Senior)		
16歳 15歳	中学校(4年間) Secondary School (Junior)	義務 教育	11年生 10年生
12歳 11歳	小学校(6年間) (Primary School)		7年生 6年生
6歳 5歳	幼稚園(1年間) (Kindergarten)		
4歳 0歳	保育園/幼稚園 (Childcare/Pre-school)		

図1 NSWでの教育システム²⁾

3 豪州および UOW の教育概観

オーストラリアの教育システムは図1に示したように日本と異なる。州によっても若干異なるが NSW 州では小学校は6歳からと日本と同じだが、中学校は4年間あり10年間の義務教育となっている。さらに、高等学校は2年間で、大学進学のほかには中学または高校卒業後、100年以上の歴史をもつ技術学校 TAFE (ティフという=Technical and Further Education) といった教育システムが用意されている。

図2には大学教育のシステムを示す。3年で学士 (Bachelor degree) を取得できるが、さらにもう一年学部にいると優等学士 (Bachelor degree with Honors) が取得できる。工学部の場合は4年修業で学部によって異なる。フルタイムの学生は1年間に48単位以上 (セメスター制: 8科目以上) をとり、

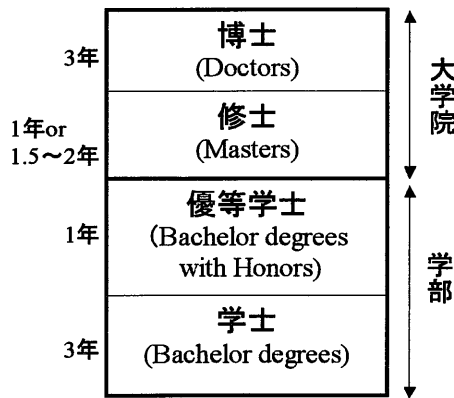


図2 大学の教育システム

3年卒業は144単位、4年卒業は192単位以上となっている。また大学院へ進む学生は殆どが Bachelor degree with Honors の4年卒業業者であるらしい²⁾。

大学院では、研究しないコースワーク修士が1年、研究を行うリサーチ修士が1.5年~2年と日本に比べて短く、博士は3年と日本と同じである。また、学部を卒業したあと、経営学の半年コースの「Graduate Diploma」や教員やソーシャルワーカー向けの1年間コースにより、「Graduate Certificate」という

日本にはない学位を取ることができる。その他、いろいろと細かいコースがあるようだが、概ね以上のような教育システムを備えている。入学は、秋入学(2月)と春入学(7月)があり、授業は秋(2月~6月)、春(7月~11月)のセメスター制でオプションの夏(12月~1月)のセッションに分かれている。その間の休みは日本と同じようにあるが、セッションの真ん中に Mid-Session Recess という休みが1週間入っている(AVCC: オーストラリアの学長委員会で決まっている)、また試験期間の前に Study Recess という休みが1週間入っている。なにやら、休みばかりだなあとと思われるが、内容が濃い(朝8:30~17:30までの授業で、Civil Engineering の場合には、一日同じ科目で4時間の講義(朝8:30~12:30)と同じ週に少人数グループに分かれたチュートリアルが2時間が開かれており、充実したカリキュラムを取っている)のである。

学費は、永住権を持っている学生と留学生と異なり、工学系の学部生で、国外学生の授業料1年で約 A\$17,500(A\$1=¥80)と日本の私学とほぼ同じ。年間で8科目(48単位)を取得する場合の授業料であり、1単位あたり A\$365 に対して、オーストラリア人学生は1単位あたり A\$300 弱と安くなっている。1987年までは、なんとオーストラリア人は無料であったという。

オーストラリアの人口は日本の約 1/7 である。一方、オーストラリアの大学は40校ほどで日本の702校に対して 1/18 である。この比率からいくと日本に比べて随分と大学が少ない。表2はデータが古いが参考までに学生数の日豪の比較を示した。比率が変わらないとすれば、人口当たりでは日本よりとくに大学院修士、博士への進学率が4から8倍と

表1 授業の主な日程(2004-2005)¹⁾

AUTUMN SESSION	
2月23日-4月8日	Lectures (7weeks)
4月9日-4月16日	Mid-Session Recess (1week)
4月19日-5月28日	Lectures (6weeks)
5月31日-6月4日	Study Recess (1week)
6月5日-6月18日	Examinations (2weeks)
6月21日-7月16日	Mid-Year Recess (4weeks)
SPRING SESSION	
7月19日-9月24日	Lectures (10weeks)
9月27日-10月1日	Mid-Session Recess (1week)
10月4日-10月22日	Lectures (3weeks)
10月25日-10月29日	Study Recess (1week)
10月30日-11月12日	Examinations (2weeks)
SUMMER SESSION	
11月29日-12月17日	Lectures (3weeks)
12月20日-12月31日	Mid-Session Recess (2week)
1月4日-1月28日	Lectures (4weeks)
1月31日-2月4日	Study Recess (1week)
2月5日-2月11日	Examinations (1weeks)

表 2 日豪の比較(92 年²⁾に加筆)

	オーストラリア	日本
人口	1700万人 (1900万人)	1億2000万人 (1億4000万人)
大学生	36校 (38校)	523校 (702校)
学生数	55万9365人	213万2064人
学部	45万人9958人	203万2629人
修士	8万5512人	7万3636人
博士	1万3895人	2万5799人

() 内は 2003 年

高いのが特徴である。また、オーストラリアの学生は 30 歳以上の学生が全学生の 3 割程度と年齢が高い。先日、我が家にご招待したお向かいのユニットにすむ大学院の学生二人も関東出身だが、教育学の博士を取ろうとがんばる女性たちである（あの空港で最初にお会いした教育学部副学部長のところを良く知っていた）。また、一人はアメリカの大学院を出ており、彼女の話聞いていてもアメリカより比較して年齢層が高いと言う。そういえば、私の住んでいる Graduate House(写真 7, 3 ヶ月で追い出される予定)には、日本人が多く住んでおり、夫婦や子供連れで、日本の会社を辞め、貯金を崩して勉強しに来ている学生も少なくない。そのため皆必死で勉強しており、「試験の結果が即、人生に影響する」と言っていた学生の言葉が印象的だった。



写真 7 Graduate House (大学宿舎)

オーストラリアも 1982 年から 1991 年までの 10 年間に学生数は 34 万人から 54 万人へと 57% も増加した。現在の日本と同じように質の低下の問題が生じてきた。公式には学生の質が低下していると言にくいだろうが、オーストラリアはしっかりと認識してまともに取り上げ、様々な学位取得コースの開設や企業との連携などを行うことによって教育システムを立ちなおしたものと思われる。それには、数少ない大学の個性を保ったままの連携・規制と、伝統的な職業技術教育がベースとしてあったのかもしれない。日本は、あまりにも数が多い大学と教授陣、質の低下を認識することへの抵抗、さらには中等教育の乱れもあり、オーストラリアのように行かないことは私でも予想できる。

オーストラリアでは、卒業する大学によって年収が違うらしい。クイーンズランド州のある某有名大学は入学難易度ランクで「難」であるが、新卒者の年収は「並以下」である。一方、この UOW の入学難易度ランクは「並」だが、新卒者の年収は「優」とされている²⁾。入学の難易度と新卒者の年収は必ずしも比例しなく、いかに大学が優秀な学生を育てるのかというところがとても面白いと思う。「The Good Universities Guide」³⁾において UOW では、1999・2000, 2000・2001 年連続、オーストラリアの大学の教育に関する賞 (University of the Year) を受賞している。Freeway の看板には大きくその業績が示されている。噂によると少数人数制で行われる授業のチュートリアルの評判がよく、シドニーの大学からもチュートリアルを受けに来るらしい。

4 おわりに

本原稿は渡豪 1 ヶ月の間に記したもので、まだ十分に理解していない点多々あり、ある一面だけかもしれないので、その点をご容赦いただきたい。これから 10 ヶ月間を経てさらに得た情報は別のところで報告させていただくとする。

今回、中部大学長期海外研究員として渡豪させていただくことになり、関係者各位に記して謝意を表すとともに、JABEE 受審準備の忙しい中、都市建設工学科教職員の皆様のご協力を頂き、このような機会を得ることができたことに深く感謝の意を表します。

最後に、こちらに来て 10 年在住の日本人の方に教えていただいた本で、本原稿にも多々引用させていただいた本を紹介しておきたい。「元気のでるオーストラリア」(ISBN4-320-05476-8)²⁾という 7 年前の出版物になるが、ある国立大学の助教授である筆者が私と同じように UOW に研究員として

渡豪する経緯からソフトなタッチで書かれた書物である。UOW の大学教員の給料から 4 リットルワインの話、研究のクオリティとは、オーストラリアの大学研究政策の考え方、豪州最大研究機関の CISRO (Commonwealth Scientific and Industrial Research Organization) 等の日本人研究者インタビューなどが書かれており、今後、海外の大学に行こうと考えられている方だけでなく、研究者育成という大学の役割の一参考になればと、ここに紹介して筆をおくこととする。

(15/10/04 Wollongong にて)

引用文献等

- 1) www.uow.edu.au: ウーロンゴン大学のホームページ
- 2) 白楽ロックビル: 元気のでるオーストラリア, 共立出版, 1997.
- 3) www.thegoodguides.com.au: The Good Universities Guide のホームページ



写真 8 Mt. Keira からみた UOW (左 Freeway と中央道路の間) と海岸線 (中央右がシンボルの灯台)